※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

挨　拶

謝　　辞

被表彰者代表
中　山　喬　志

ただいま表彰をいただきました中山でございます。僭越でございますが，ご指名でございますので被表彰者を代表いたしまして御礼を申し上げますとともに，一言ご挨拶申し上げます。私といたしましては，このような個人的な表彰をいただきますのは初めてでございまして，非常に喜ばしく思っております。どうもありがとうございます。

この表彰を告げたい方が２組いらっしゃいます。１組目は，私が東芝に入社したときの特許部長でございます。当時の特許部長は，既存の事柄，約束事は意に介さずに，すべからくなぜこうなっているのか，なぜこうしなければないのかというように，なぜの連発でございました。お陰様で，物事を考えるとき，常になぜということを念頭に置くようになりました。35年にわたってこの知的財産エリアで仕事をしてまいりましたが，原点はそこにあって，その効果があって，皆様方と一緒に仕事ができたのではないかと思っております。

もう一つは，日本知的財産協会，とりわけ商標委員会の皆様でございます。私が東芝に入ってすぐに，商標担当は私１人になりました。非常に悩みながら，わけもわからず仕事をしていたわけでございますけれども，時の課長から商標委員会にエントリーしていただきまして，そこで歴代の委員長，副委員長，諸先輩の方々からいろいろなことを学びました。私にとりましては，商標委員会は単に知識を習得するところ，あるいは管理手法を習得するところだけではなくて，いわゆる人生の道場でございました。会社におきましては得られないような情報をこの委員会にて多く学びましたし，いち早く習得することができました。そういう意味では委員会に非常に感謝している次第です。

1986年から２年間，商標委員会の総仕上げとして委員長を務めました。以来14年間，知財協活動から離れておりましが，2001年にまた再び常務理事として戻ってまいりました。人いわく，鮭が生まれた川に戻って来るがごとくということでございました。私も，戻ってきたときは，非常に居心地がよく，その後，副理事長も務めさせていただきましたし，また現在は総合企画委員会の委員長を仰せつかっております。総合企画委員会の委員長として，いろいろ，今後の知財協のあり方，今のあり方がいいのか，今後どういうふうに向かうべきなのかというようなご諮問を理事長からいただいて答申しているわけでございます。

しかしながら，一番根っこの問題というのは，会員皆様方の心根の問題です。やはり，知的財産協会を良い方向に持っていくためには，会員代表の皆様方の積極的なご参加を賜りたいと思っております。ある人いわく，自分の仕事の環境を変えたい，だけれども１人ではなかなか変えられない。知財協には自分と同じような考えの人がたくさんいる，そういう人たちと一緒に環境を変える仕事をした

※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

い。だから専門委員会に入った，だから執行部に入っているというようなお話をされる方が数多くいらっしゃいます。

ここでお願いでございますが，やはり，会員代表の方々がみずから知財協のほうに目を向けていただいて，もしくは，自分でできない分は部下を使って，知財協の行く末を見ていただきたい。変化を生み出す努力をしていただきたいと思います。なかなか右腕になっている部下を手放す，完全に切り離すわけではないですけれども，知財協へ派遣するということは非常に苦しいことであります。しかしながら，他人の釜の飯を食べさせるというのも人材育成の一つの道だと思います。

したがいまして，今後，ますます会員代表の皆様，もしくは部下の方々を通じて直接的な，あるいは間接的なコンタクトを日本知的財産協会に向けていただきますように，そのことを祈念いたしまして本日の挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。